

2025年9月発行

茨木御堂
第303号



真宗大谷派



茨木別院

(輪番 河原 恵)

〒567-0817 茨木市別院町3-31
TEL (072) 622-2903
FAX (072) 625-9445

南無阿弥陀仏 人と生まれたことの意味をたずねていこう

みんなに願いがかけられている

本堂修復作業



無量寿如来に
帰命し
不可思議光に
南無したてまつる

(『真宗聖典』第二版二二六頁)

真宗門徒の生活には、正信偈さまがあります。その冒頭の言葉が「帰命無量寿如来 南無不可思議光」です。親鸞聖人は、漢詩であるこのうたの読み方をカタカナで補ってくださっています。それによると「南無」のところに「シタテマツル」と書いてあります。「奉る」という言葉には「仰いで告ぐ」という心が含まれています。また、正信偈の前におかれている偈前の文には、
爾れば、大聖の真言に帰し、大祖の解釈に閱して、
仏恩の深遠なるを信知して、「正信念仏偈(「正信偈」の正式名称)」を作りて曰く、(『同』二二六頁)とあります。
「大聖」とは、お釈迦様のことです。「大祖」というのは、お釈迦様が亡くなったあとその教えを伝えてくださった高僧方のことを言います。お釈迦様の説かれた真実の教えが、歴史となって親鸞のところに届いたという感動を表現された言葉だと思えます。親鸞聖人は、真実の教えとお念仏が伝えられてきた歴史を仰ぎ、その中に仏恩の深いはたらきを感じられて、正信念仏偈を作られたのです。
私たちの一生は、自分ひとりで歩めるものではありません。自分の思いだけで出来ているのでもありません。同じ時代を生きる人たちとともに心や智慧を共有し、歩み続けるところにあります。先に生まれ、私たちを導いてくださった人たちが残してくれた真実の教えと願いを聞きとり、大道を歩む者になることだとも言えます。
「無量寿如来に帰命し、不可思議光に南無したてまつる」と、如来の本願と真宗念仏に出遇った感動を口ずさみながら、知恩報徳の人生を歩む者に成りたいと強く思っています。

南無阿弥陀仏 輪番 河原 恵

茨木別院関連ホームページ

茨木別院 → ibarakibetsuin.or.jp

いばらき大谷学園 → ibarakibetsuin.or.jp/kids/

真宗教団連合ホームページ

<http://www.shin.gr.jp/>

真宗教団連合

検索

茨木別院 月行事ご案内

九月

● 教如上人ご命日・五日講

- ・ 日時 五日(金)
- 午後一時半より
- ・ 講師 加藤 恵師
- ・ 会場 別院会館

● 本山九日講

- ・ 日時 九日(火)
- 午後二時より
- ・ 講師 茨木別院輪番
- ・ 会所 長徳寺

● 秋季彼岸会 ―お勤めと法話―

- ・ 日時 二十二日(月)
- 午後一時半より
- ・ 講師 茨木別院輪番
- ・ 会場 別院会館

● 親鸞聖人ご命日・二十八日講

- ・ 日時 二十八日(日)
- 午後一時半より
- ・ 講師 茨木別院輪番
- ・ 会場 別院会館



園の子どもたちへ

いばらき大谷学園



● 楽しい行事わくわくデー 木村千夏

以前は七月・八月の夏休み中に『夏期保育』という名称で行事をしていました。それを『わくわくデー』と名称を変え、子どもたちがワクワク・ドキドキするような体験や経験が出来るように新たな形で取り組んでいます。七月のわくわくデーには『アマービレフィルハーモニー管弦楽団』の方をお呼びし、生の演奏を聴く機会を作りました。楽器の紹介や、バイオリンを触らせてもらえる時間もあり、楽器の音の迫力に圧倒されながらも、知っている曲では口ずさんだり、真剣なまなざしで鑑賞する姿がみられました。鼓笛隊の曲が流れた時は、年長さんは一緒に「タンタンアップルトマト!」「パツパツパーニャーンジャン!」と管弦楽団の皆さんとコラボしたり、楽しいひと時を過ごすことが出来ました。

現在、大阪の夢洲で【関西万博】が盛り上がっています。そこで八月のわくわくデーは『関西万博・いばらき大谷学園からこんにちは』というこゝとで、一緒に盛り上がるうとオフィシャルテーマソング『この地球(ほし)の続きを』というコブクロの曲で盆踊りを踊りました。夏休みに入る前から全園児で練習し、最初は難しく覚えられなかった踊りもみんな「下から前にパツパツパ」「こんにちははチヨチヨンがチヨン」と声を掛け合いながら踊り、覚えることが出来ました。そして一学期から取り組んでいる異年齢保育で順番に踊り、大盛り上がりでした。踊りを盛り上げるために幼児組さんはミヤクミヤクのうちわを作り、乳児組さんはアイテムを一つ作りました。ミヤクミヤクのオブジェもみんなで作って盛り上げてくれました。

十月

● 教如上人ご命日・五日講

・日時 五日(日)

午後一時半より

・講師 加藤恵師

・会場 別院会館

● 本山九日講

・日時 九日(木)

午後二時より

・講師 茨木別院輪番

・会所 唯敬寺

● 親鸞聖人ご命日・二十八日講

・日時 二十八日(火)

午後一時半より

・講師 茨木別院輪番

・会場 別院会館



● 早寝早起朝ごはん 栄養士 大野知香

九月に入りましたが、まだまだ暑い日が続きそうですね。暑さに負けず元氣よく過ごせるようにしっかりと栄養・睡眠をとってほしいと思います。子どもたちの健やかな成長には「早寝早起朝ごはん」を始めとした規則正しい生活習慣が大切です。

「早寝」をして睡眠をしっかりとると、心身の疲労を回復するとともに、子どもたちの脳や体を発達させる働きがあります。

「早起き」をして朝の光を浴びると、脳の覚醒を促す脳内ホルモンのセロトニンが活発に分泌され、すっきりと目覚めることができます。

「朝ごはん」を食べて脳のエネルギー源となるブドウ糖を摂ると、午前中からしっかりと活動できる状態になります。パンやおにぎりなどでエネルギーを摂り、主菜や副菜をプラスしてたんぱく質やミネラルを摂るとバランスの良い食事になります。朝に時間がない時にはバナナを食べるのもおすすめです。

このように、朝ごはんをしっかりと摂って一日をスタートさせると活動に力が入り、たくさん体を動かすと夜によく眠れ、朝もすっきりと起きられます。『早寝早起朝ごはん』を意識して、規則正しい生活習慣を身につけられたらいいなと思います。

二学期も子どもたちが元氣よく活動できる様に、給食室の職員も頑張っていきたいと思えます。午前中におもいっきり活動をして、給食をしっかりと食べてエネルギー補給をしてください。



茨木別院報恩講 十一月十五日 結願遠夜法話

「親鸞聖人の法然観」④

講師・山田 恵文師

(三重教区三重組安正寺住職)



(前号の続き)

次に「弘願の一乗ひろめつつ」と

あります。ここにも親鸞聖人の法然観があります。弘願というのは、す

べての人々を救いたいという阿弥陀の願いです。念仏を称えるものを必ず救おうとする願い、これが弘願です。一乗というのは、ただひとつの乗り物という意味です。

これは平等の教えということを指しています。平等に誰もが仏になることができる教えという意味です。そもそも一乗は、天台宗で大事にされている教えで

す。これは『法華経』に説かれている教えで、青年時代に比叡山延暦寺で過ごされた親鸞聖人も当然学んでいるわけですが。とても大事な教えであると親鸞聖人も理解されてきました。しかし、当時の延暦寺には女性が入ることができませんでした。女性を区別していたのです。ということは、現実にはそこは一乗が実現している場所ではないということになります。誰もが平等に仏になれると説きながら、女性はその教えに出会うことさえ適わなかったのです。

そのような問題に向き合う中で、親鸞聖人は本当に一乗と言える教えはどこにあるのだろうか。そもそも一乗と言えるような教えはどういう教えなのかということを探求して、延暦寺を出ていかれるのです。そして、出遇われたのが法然上人の念仏の教えであったのです。

二十九歳の時に山を下りて、東山の吉水に行かれて、そこで法然上人と出遇うのです。そこには、法然上人の教えを聞くために、あらゆる人々が来ておられました。男も女も武士も貴族もどこかのお坊さんも庶民も、あらゆる人々がそこに集まっていました。その

情景を見て、親鸞聖人はまさにここに一乗の教えが働いていると思つたことでしょう。ですので、法然上人のお仕事を「弘願の一乗ひろめつつ」と讃えているのです。阿弥陀の本願こそが一乗の教えであり、それを法然上人は人々に伝えたとするのです。法然上人はこのようなして平等の世界を築いた人であるというのが、親鸞聖人の受け止めになります。

もう少し和讃を見てみましょう。

智慧光のちからより本師源空あらわれて

浄土真宗をひらきつつ 選択本願のべたまう

『高僧和讃』

二首目の「智慧光のちからより」というのは勢至菩薩を指しています。勢至菩薩は阿弥陀仏の脇侍です。勢至菩薩は阿弥陀の智慧の働きを表しています。この和讃は勢至菩薩が法然上人になって現れたということとを述べている和讃なのです。浄土真宗を開いたというのは教団のことではなくて、浄土真宗という教えの意味です。親鸞聖人は法然の説く念仏の教えを浄土真宗と呼んだのです。そして、阿弥陀の選択本願を述べられましたと、ここでも阿弥陀の本願を伝えた人として

て法然上人を讃えています。

善導源信すすむとも本師源空ひろめずは

片州濁世のともがらはいかでか真宗をさとらまし

『高僧和讃』

三首目では、中国の善導や日本の源信が念仏を勧めても、法然上人がもしひろめなかつたならば、どうして私たちは出会うことができたでしょうかと、法然上人のお仕事を讃えています。「片州」というのは日本のことです。日本を片州と言うのは、中国大陸があつて日本はその端にある島国であるからです。親鸞聖人の頭の中には、インド・中国・日本の位置関係が明確にあるでしょう。インドから中国を経て日本にまで仏教が伝わってきたというイメージがあるのだと思います。私たちは、私たちは、片州、つまりその端っこにいます。その片州であり、五濁悪世に生きる私たちは、一体どのようなして真宗に出遇うことができたでしょうか、と。つまり、法然上人がこの日本で念仏の教えを弘めてくれなかつたら、どのようにして私たちは、人生の抛りどころに出遇えたであろうかといって、法然上人のお仕事を讃えているのです。

四首目では親鸞聖人が自分のことを謳っています。七高僧一人ひとりを讃える『高僧和讃』の中では、これは異例の和讃とされています。

曠劫多生のあいだにも 出離の強縁しらざりき

本師源空いまさずはこのたびむなしくすぎなまし

『高僧和讃』

「曠劫多生」というのは、ずっと昔から迷いを繰り返してきたということです。「出離の強縁しらざりき」とは、迷いから離れ出る縁に出会うことがあります。せんでした、という意味です。「本師源空いまさずはこのたびむなしくすぎなまし」とは、「もし法然上人がおられなかったら、この度の人生もまた空しく終わっていたことでしょう」という意味です。逆から言えば、法然上人と出遇えたことよって、私の人生は空しく過ぎることはありませんでした。つまり、この人生を満足して生きられるようになりました、と謳っている和讃なのです。

親鸞聖人には、ずっと迷い続けてきたという実感があるようです。「しらざりき」というのは、迷いから

離れ出る手だてを知らなかったという過去を述べているわけですが、これも、「しらざりき」の「き」は、自分が直接経験した過去を語る助動詞です。過去を述べるのにも、私はご飯を食べましたと言えば、これはご飯を食べたという経験を語っていることになります。しかし、人から聞く過去もあります。たとえば、竹取物語の始まり、「むかしむかし竹取の翁というものありけり」というのは、昔むかしに竹取の翁という者がいましたという過去になります。しかし、私たちはそれを見ていないわけで、直接経験をしません。そのような伝聞の過去を述べる助動詞である「けり」と、実際に自分が経験した過去を述べる助動詞「き」があります。ですので、親鸞聖人が言う「しらざりき」とは、まさに親鸞聖人自身の実感を述べた言葉ということになります。私はずっと迷ってきて迷いから離れる縁を全然知りませんでしたと、実感を述べているのです。そして、その私が法然上人に出遇うことよって、満足して生きることができるようになりましたと、自分自身のことを述べているのが四首目の和讃になります。

以上のことから分かりますように、和讃には順序が

あります。まず、法然上人がこの世に誕生して果たした仕事を讃えて、念仏の教えが日本に弘まったことを謳う。そして、その念仏の教えに出遇えたことよって、空しく過ぎることなく人生を生きることができるようになりましたと、四首目で自身のことを謳っておられるのです。

親鸞聖人は法然上人が説いて下さった念仏の教えに出遇って救われた方です。その教えを生涯大切な拠りどころとして生きられた方であるということが大事なところですよ。そして、法然上人が、阿弥陀の本願念仏を説いて下さったことに対して、深い恩徳を感じ、和讃を作ったり、「正信偈」を作ったりして、そのお仕事を讃えているのです。ですので、法然上人のことを親鸞聖人は、たとえば阿弥陀の化身というように、私たちからするとすぐに理解することが難しい不思議なことを言いますが、それはただ単に法然上人は特別な人だと讃えているのではないのです。阿弥陀の本願念仏を伝えて下さった方だと受け止める中から、そのように述べているのです。それはまさに阿弥陀と同じ仕事をした方だとその仕事を讃えての表現であるというように理解すべきかと思えます。もともと浄土に

おられた方だと和讃で謳うのも同じです。

単に法然上人は人並外れてすごい人だということから、阿弥陀の化身、勢至菩薩の化身と讃えているのではなく、その仕事の中身、つまり、真宗という法を説いて下さったということからそのように仰いでいるわけです。ここを大切にしないといけないと私は思っています。

さて、本日二回の話の中で、親鸞聖人は法然上人の背景にあるものを見て、それを大切にしたい人であるということを確認してきました。これはその人を支えているもの、よりどころになっているものを見ているということです。この親鸞聖人の法然観を学ぶ中で、私自身思っていることは、出会う人の背景に思いを致せるような人間になっていきたいということです。私たちはさまざまな人々と出会うわけですが、どなたにも背景があるはずですよ。その人を生み出しているもの、あるいはその人の支えになっているものなどです。その背景を見る視点の大切さということを、私自身親鸞聖人から学んでいることです。

(完)

〈合祀納骨案内〉

合祀墓を増設いたしました。八月より合祀納骨の受付を再開しております。詳細については茨木別院事務所までお問い合わせください。

■特別納骨

納骨料…五〇万円

■個別納骨

納骨料…三〇万円〜一〇万円

※法名プレート刻銘料三万三千元が別途必要となります。

■合同納骨

納骨料…七万円

●茨木別院事務所

☎〇七二一六二二一―二九〇三



敬 弔

ご生前のご遺徳を偲び、
謹んで哀悼の意を表します。(敬称略)

記

●法名 釋尼都見

俗名 安岡みや子 七十九歳

●法名 釋尼撰受

俗名 橋本セツ子 九十七歳

●法名 釋常照

俗名 田中照久 七〇歳

●法名 釋作佛

俗名 橋本秋作 一〇一歳

●法名 唯佛院釋尼幸信

俗名 出田シヤチ子 九十三歳

●法名 清浄院釋尼智海

俗名 林田智子 五〇歳

編集後記

本堂屋根の修復工事が始まって約半年近くが経ちました。本堂の屋根を作業場から見学させてもらうと改めてその大きさに驚きました。大きな屋根にはそれだけ多くの数の瓦がのっており、瓦の下には土も盛られていました。瓦おろしの作業が長らく続いていましたが、瓦だけでなく土も一緒におろす作業となるので夏の暑さも重なり大変な作業となりました。

今年の茨木別院の報恩講では、法要とともに屋根の見学会も予定しています。参加いただいた方には、近くから本堂屋根の大きさを見てもらえればと思います。

竹内明人

株式会社花 廣

茨木市大手町二二一八

☎(〇七二)六二二一―二四〇二

— 生花・供花・けいこ花 —